

<p>1 学校教育目標</p> <p>いきいき久間っ子の育成</p>	<p>2 本年度の重点目標</p> <p>≪思いやりの心を持ち、自分で考え、進んで活動する子どもを育てるために、すべての子どもが「できる」「わかる」「参加する」教育活動に取り組む。≫</p> <p>①<学力の向上>・・・工夫して学ぶ子プロジェクト ○伝え合い学び合う活動を通して、書く力・話す力等の表現力及び読む力を伸ばす ○ICT利活用による授業実践の積み上げる</p> <p>②<健康な体をつくる>・・・強くて逞しい子プロジェクト ○自分なりに楽しめる日常的な遊びや運動の習慣を身につけ、体力の向上を図る ○目標の時刻までにふとんに入る習慣を身につける</p> <p>③<道徳教育の推進><特別支援教育の推進>・・・心やさしい子プロジェクト ○心に響く道徳の授業づくりを通して道徳心の向上を図る ○支援体制を確立する ○学習環境のユニバーサルデザイン化に取り組む</p> <p>④<地域連携の促進> ○地域の人材・教材を生かした実践の充実を図る</p>
------------------------------------	--

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 「工夫して学ぶ子」育成に向け、自分で考え創り出す活動の実践							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	読書活動の充実	年間「100冊読書」達成する児童を85%以上にする。	・朝の時間に読書タイムを行い、静かな授業の始まりを迎える。 ・週末読書や読書回覧板(低学年)に取り組み、家庭での読書の習慣化を図る。 ・図書館祭りや読み聞かせを実施する。	B	・100冊読書(進んで読書)目標85%: 合計(79.4%) 100冊達成は全校児童の約半数 ・朝読書や委員会の活用等読書活動の推進をしているが、読書量の個人差が大きい。100冊読書を目指しながらも底上げを図るための方策を立て取り組んでいく必要がある。	○図書委員会や係活動の活用、本の内容の紹介等、読書指導の工夫を進める。 ○読書が苦手な児童への手立てとして50冊達成を85%以上に設定する。
		家庭学習習慣の確立	・家庭学習に取り組む方法が分かり、自ら家庭学習に取り組めると自信を持って回答する児童を90%以上にする。	・家庭学習チェックシートに取り組むことで、家庭学習指導の徹底、学習準備の徹底や学習習慣の確立を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、学年に応じた学習時間や内容の充実を図る。 ・家庭学習(自学)ノートコンテストを実施し、更なる内容の充実を図る。	A	・家庭学習への取組み(毎日勉強)目標90%: 合計(91.7%) ・学校塾に通っている児童も多く、家庭学習(宿題を含む)は、よくできている。各学年で特定の児童が習慣化できていない。	○久間小メソッドの活用を徹底していく。 ○習慣化できていない児童に対する家庭学習の取り組み方(工夫と徹底)について個別指導を進め、徹底させる。 ○チェックシートの実施とふりかえり・自学ノートコンテストを実施していく。
		獲得した知識・技能を活用し、表現する力の育成	・自分の考えをノートに書いたり、「交流タイム」で発表し合ったりすることができる児童を80%以上にする。	・授業の中に自分の考えをまとめる時間や伝え合う時間を確保し、表現することの大切さを実感させながら表現力の育成を図る。 ・研究授業等を設定して、児童の表現力を育成する指導力の向上を図る。	B	・自分の考えをまとめた発表したりする目標80%: 合計(69.4%) ・授業の中に交流タイムを仕組んだことで少しずつ自分の考えを表現できる児童が増えてきているが数値としては低い。アンケートの質問に交流タイムという言葉を入れれば数値は上がるかもしれない。また、できていることを承認し、励ましながら実感を持たせたい。	○「考えを持つ、発表する」ことができていることを承認し、実感を持たせるために言葉かけの励行を行う。
	●ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育の推進	・教職員のICT利活用教育に関する基本的なスキルの向上を図る。 ・電子黒板やICT機器を活用した授業を積極的に進める職員を95%以上にする。	・電子黒板やICT機器等について、校内研修会を計画的に行うだけでなく、支援員を活用してミニ研修会を随時設定する。 ・ICTを利活用した実践の情報交換を行う。	A	・ICT利活用 目標95%: 合計(92.9%) ・電子黒板がいつでも使える状況にあり、導入段階での課題提示、児童の学習成果の提示や説明等、学習への動機づけ、思考や理解を深めるために、その活用効果が実感できている。また、デジタル教科書、NHKデジタルコンテンツ等、興味関心を高める有効な教材として活用できている。	○情報化推進リーダーを中心に、先進的事例を積極的に収集し、職員間、情報支援員との情報交換を進めながら、実践力を高めていく。
○子どもの活動づくり	学級活動の充実	・係活動や当番(日直・掃除・給食)活動で「責任を持って自分の役割を果たしている」と回答する児童を90%以上にする。	・学級において、仕事を担う意義を理解させ、計画・実践・ふり返りの時間を保障し、活動の支援や助言を行う。 ・係活動で、当番の活動と自主的活動を意識させて取り組ませる。	A	・責任を持って自分の役割を果たす(係や仕事)目標90%: 合計(96.1%) ・係や当番の活動は、責任を持ってできているので、自主的活動まで目指していく。	○児童が目的や意義を実感し、主体的に決定した活動内容を実践して達成感や成就感を味わう経験を積み重ねながら、自主的活動を目指していく。	
② 「強くて逞しい子」育成に向け、進んで運動に親しむ活動の実践							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・毎日、朝食をとって登校する児童を95%以上にする。 ・目標の就寝時刻に、布団に入る児童を90%以上にする。	・毎月、保健だより・食育だよりを発行し病気の予防法や食事の大切さを保護者に伝える。 ・朝食をバランスよく食べることや睡眠の大切さを保護者や児童に伝える。 ・毎朝の健康観察時に児童の就寝時刻と朝食喫食について調べる。 ・年に3回生活習慣チェックシートを配布し、生活習慣を見直す機会を設ける。 <就寝時間(布団に入る)の目安: 低(9:00)中(9:30)高(10:00)>	B	・毎日必ず朝食をとる児童目標95%: 合計(98.9%) ・朝食喫食率は4.3の割合が98.9%であり、ほとんどの児童が朝食を摂ることができている。保護者も児童も、朝食を摂ることの大切さを理解できている。 ・目標の就寝時刻に寝る児童を90%: 合計(83.3%) ・就寝時間については、高学年になるにつれて守られなくなっている。また、保護者が73.8%と児童との意識の差も見られる。なぜその時間に布団に入ることができないのかを尋ねて、改善をうながしていかなくてはならない。	○朝食喫食、就寝時刻について引き続き指導を行う。保護者にもお便り等で状況を伝えていく。そして、習慣付けさせる。
		運動習慣の定着化	・休みに外に出て遊ぶ児童を90%以上にする。	・いろいろな運動を紹介し、児童に奨励する。(縦割共遊、がんばるマラソン、久間リンピックチャレンジランド) ・外遊びを奨励する。(前期は学級で、後期は全校的取り組みを行うようにさせる。) ・天気の良い日は外で遊ぶように放送で呼びかける。	B	・休みに外に出て遊ぶ児童を目標90%以上: 合計(88.9%) ・休みの外遊びについての3・4の割合は、中間(85.7%)よりは上がったが、目標の90%には達せなかった。久間リンピックやドッジビー大会等の企画の効果はあった。	○天気の良い日は外で遊ぶように呼びかける等の意欲付けを図る。 ○久間リンピック、大縄大会等を次年度も計画し、外に出て活動する機会を増やす。 ○体育委員会でなぜ外遊びをしない児童が多いかを考えさせ、対策を練って実行する。(縦割で遊ぶ計画を立てたり、遊びを紹介したりする)
	○子どもの活動づくり	縦割り活動・クラブ活動の充実	・縦割り活動で「他の学年の人と楽しく活動できた」と回答する児童を90%以上にする。 ・クラブ活動で「他の学年の人と協力して活動できた」と回答する児童を90%以上にする。	・異学年で共通の興味・関心を追求させながら、活動計画や準備を事前に知らせたり、活動中の進行等をしたりする自主的な活動の場を保障する。 ・異学年で交流する楽しさを味わえる、場と時間を保障する。	A	・縦割り活動で「他の学年の人と楽しく活動できた」目標80%以上: 合計(98.3%) ・縦割り遊び、クラブ活動は楽しみにしている児童がほとんどである。	○児童の自主性を大切にしながら、委員会活動を中心に様々な企画をさせ、活動の場を保障するとともに内容の充実を図りたい。

③ 「心やさしい子」育成に向け、人の気持ちを考える活動の実践								
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	
教育活動	●心の教育	道徳教育の充実	・年間計画と別業に沿って、道徳の時間および道徳教育の充実を図る。 ・ 年1回以上 、道徳の授業を公開する。(6月の授業参観「ふれあい道徳」)	・道徳の授業研究会を全学級で実施する。 ・道徳の教科書を活用する。 ・「心やさしい子」プロジェクト部会からふれあい道徳を提案する。 ・ふれあい道徳の実施にあたっては、地域人材の積極的活用や「学校便利」、「学級通信」等を通じた情報発信に努め、広く道徳教育への理解を図る。	A	道徳教育の充実(職員)「計画的な道徳の授業を実施」: 合計(100%) (保護者)「道徳教育を通して心やさしい子を育成」: 合計(95.3%) ・昨年度から道徳教育を校内研究に位置づけた。2年目となる本年度は、昨年度の成果と課題を生かしつつ、計画的な授業実践を行ってきた。また、日常生活につながる取組みへ広げることもできている。	○「継続」を合言葉に、年間35時間、道徳の時間の授業を年間計画に基づいて実践し、児童の心を揺さぶりながら心に響く授業をしていくことで、心やさしい子を育成していきたい。 ○次年度も校内研を「道徳教育」とし、計画的な校内研修の推進を図る。	
		生徒指導の充実	・人の気持ちを考えることができる児童を90%以上にする。 ・自分から挨拶ができる児童を90%以上にする。	・挨拶、そうじ、思いやりの3点について月ごとに具体的なめあてを設定し、プロジェクト部会を中心に達成状況を評価する。 ・学年ごとに生活カレンダーを活用して週や月単位で評価しながら指導の徹底をはかる。	B	(職員)「生徒指導力の向上」: 合計(100%) (児童)「友達の気持ちを考えて行動」目標90%: 合計(93.3%) (保護者)合計(89%) (児童)「進んで挨拶」目標90%: 合計(95.6%) (保護者): 合計(86.6%) ・月目標を全校朝会で知らせ、達成状況について話し合い、日常の指導に生かしている。挨拶や返事については、場に応じた挨拶の仕方、声の大きさ、立ち止まっただけの挨拶等、具体的に例を見せたり、挨拶ゲームを取り入れたことなどで、児童の意識は高まっている。ただ、個人差は大きく、まだ定着しているとは言えないので、家庭との連携も含めて今後の課題である。また、人を傷つける言葉等も聞かれ、その時、その場での指導を継続していく必要がある。	○挨拶や返事等の定着に関して、場に応じた挨拶の仕方、声の大きさ、立ち止まっただけの挨拶等、具体的に例示して指導を継続するとともに、保護者の協力を得るため、学校便利や学級通信、PTAの集まりの機会を生かして啓発に努め、協力を呼びかける。	
		特別支援教育及び教育相談体制の充実	・特別支援教育について理解し、取り組んでいる職員を 90% 以上にする。 ・気にかけておきたい子の実態、支援の在り方について共通理解を図り、実践している職員を 90% 以上にする。	・特別支援教育に関する研修会を実施し、特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制を確立する。 ・毎月「子ども支援会議」で支援の必要な児童の実態についてスクールカウンセラー、巡回相談員、教育相談員等を活用しながら情報交換し、支援の方法を検討する。	A	(職員)「特別支援教育の視点に立った指導」目標90%: 合計(92.9%) (保護者)「学校は悩みや相談に対応している」: 合計(93%) ・毎月「子ども支援会議」を持つことで支援を必要とする児童について、全職員で児童の特性や変容を把握するとともに、職員間の児童理解を深め、児童一人一人に応じた支援体制の充実を図ることができた。また、うれしの特別支援学校の巡回相談やスクールカウンセラー等、専門機関との連携を図るとともに、ケース会議を随時行うことで、より良い支援を行うこともできた。 ・児童や保護者へ、不安や悩みに対するスクールカウンセラーの活用を促し、11件の相談依頼を受けることができた。	○特別支援教育及び教育相談について、職員の知識を深める研修の場、ケース会議等を設け、支援する技量を高める。 ○引き続き、巡回相談やスクールカウンセラー、市の相談事業等、躊躇うことなく専門機関との連携を進めて、より良い支援につなげるようにしていく。 ○より多くの保護者が相談できる場となるよう、計画的なスクールカウンセラーの活用計画を立てるとともに、保護者への啓発を図る。	
	●いじめ問題への対応	・いじめのない学校づくり	・いじめはどの学校にも必ず起こるものであるという認識の下、人権教室、児童アンケート等を行うことにより、いじめを許さない意識付けを図り、早期発見・早期対応をする。 ・ハイパーQUテストを活用した学級づくりを行い、満足型の学級をめざす。	・いじめに関する児童のアンケートを年2回実施する。(7・12月) ・児童のアンケートを基に児童との面談を実施し、いじめの早期発見、よりよい解決に努める。 ・「仲間・連帯」「やさしさ・思いやり」をテーマとした学年グループでの人権集会(6月)や、いじめをテーマにした人権集会(11月)を実施し、児童の心を耕していじめを許さない心を育む。 ・ハイパーQUの効果的な活用を図るために研修会を実施しテストの結果をもとに児童の実態把握を行うことで支持的風土のある学級づくりに生かす。さらに2回目を実施することで指導の在り方を振り返り、その後の学級づくりに生かす。	A	いじめ問題への対応(児童)「学級や学校は楽しい」: 合計(94.4%) (児童)「心配事や悩み事があった時に、相談する人がいる」合計(83.9%) ・いじめの防止・早期発見、早期対応については、本校「いじめ防止基本方針」にのっとり、相談箱の設置やいじめに関するアンケートの実施、児童に対する日々の観察・聴き取り・指導に努めていきた。相談箱や保健主事に児童からの相談が寄せられており、早期発見という点に関しては、成果を上げている。12月のアンケートでは、寛知はなかった。 ・ハイパーQUの実施とハイパーQUに関する研修会(8月)を行ったことで児童の実態を把握し、満足型の学級づくりに生かした。また、第一回目のQUを受けて、夏休期中に講師を招いた研修会では、各学級の分析を行い、学級集団づくりアセスメント・対応策シートを作成し、PDCAサイクルでより良い学級づくりの取り組みを進めている。	○いじめについては、どの学級でも起こりうるということ意識のもと、常日頃からいじめ防止につとめていく。また、引き続き相談箱の設置やいじめに関するアンケート(2回)、全児童への聴き取り等を行い、いじめの早期発見に努める。 ○ハイパーQUについては、来年度以降も、年間計画に位置づけ(6月・11月実施)、学級集団の現状把握と改善を行い、ハイパーQUに関する研修会等を生かして、今後も、より良い学級づくりを進める。また、児童が次の学年になったときに、申し送りを確実にし、新年度からの学級経営につなげていく。	
④ 保護者・地域との連携を深めるコミュニティ活用の推進								
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	
学校運営	○保護者・地域との連携	家庭・地域コミュニティとの連携による学習支援体制の充実	・保護者の授業参観率を 85% 以上にする。 ・家庭や地域コミュニティとの連携を図った授業や活動を計画的に実施し、地域の教育力を生かした学習支援体制を充実させる。	・学校だよりやHP等で早めに授業参観日や懇談日、学習内容を知らせ、保護者が計画的に参加しやすいようにする。 ・各教科や総合的な学習の時間における年間計画を作成するとともに、連携活動に係る事前打合せにおいて、活動のねらいや内容についても共通理解を図る。 ・地域コミュニティに加え、家庭にも積極的に呼びかけて、支援体制の充実を図る。 ・児童や保護者に対して、地域行事や地域ボランティア活動等への積極的な参加を働きかける。	A	(保護者)「授業参観や地域コミュニティとの連携活動に協力している」: 合計(85%) ・PTA総会授業参観率-84% PTA総会-73% 学級PTA-91% 遠野教育の日-134% (職員)「コミュニティや地域の教育力を活用した実践」: 合計(92.3%) (保護者): 合計(95.3%) (児童)「コミュニティの人と一緒に勉強することは楽しい」: 合計(95.0%) ・保護者の授業参観率は、ほぼ目標値に達し、アンケートからも保護者の高い意識がうかがえる。 ・「地域連携の教育活動計画」の作成に加え、今年度から活動内容だけでなく、ねらいや指導内容について地域サポーターとの事前打合せで共通理解を図っているため、指導する側の連携が取れている。また、具体物の直視やより細やかな人的支援が可能なので、児童の学習意欲は自ずと高まり、その効果が高まっている。児童の95%が学習を楽しみにしており、保護者も、同じく95%以上が高い評価をしている。職員の意識も着実に向上し、地域連携、CSの効果を実感することができている。 ・事務局と学校側コーディネーター(窓口:事務職員、教務)との連絡が密にできており、職員の負担軽減にもつながっている。	○授業参観の出席率をさらに上げるため、早め早めの広報活動やすべての子どもが活躍できる(交流タイム等)授業づくりの工夫等に取り組んでいく。 ○「地域連携の教育活動計画」の確実な実施のために、早め早めの連絡調整を行う。また、保護者や家族(祖父母等)にも積極的な参加を促し、学校、家庭、地域が一体となったコミュニティ・スクールの推進を図っていく。 ○福祉学習をはじめ、学んだことを地域で生かす活動を展開する。(福祉:介護施設や老人会慰問、家庭科:公民館へ手作り雑巾配付手縫いお守り他)	

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○小中連携教育	小中連携教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・9年間を見通した基本的生活習慣、及び、学習習慣の確立を推進する。 ・「ろくさんプラン」の分科会ごとに、スリーステップで取り組む内容を把握し、実践していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学校の生徒指導方針の情報交換を行い、本校の生徒指導にかかしていく。 ・発達段階をふまえて小中一貫した授業規律を共通理解し、実践していく。 ・参観できる授業や出前授業等について相互に情報交換し、授業交流を行う。 	B	(職員)「ろくさんプラン(小中連携)を意識しながら教育活動」: 合計(85.7%) ・ろくさんプラン研修会で、各分科会からの報告会(全体会)を設け、協議内容や総括、来年度に向けた計画等について、全員が把握することができた。 ・塩田中入学説明会では模擬授業体験や部活動の見学をし、事前に施設見学や授業参観をすることで早期から進学への心構えを持たせることで、中1ギャップの解消につながった。 ・中学校の授業参観(道徳)を意図的に設け、授業風景や生徒の様子を垣間見ることができた。 ・授業のはじめと終わりに立腰をしたり、月のばじめにノーテレビノーゲームデーに取り組んだり、小中で連携した取り組みを実施することができた。	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の約束や学習の約束について、小中各学校で作成されているものを集めて集約し、小中連携や小中連携に生かしていく。 ○各学校の研究授業等の年間計画を出し合い、参観できる授業について情報提供をし合っていく。 ○ノーテレビ・ノーゲームデーの実施率を上げる工夫について情報交換し、今後の取り組みに生かしていく。
	○学習環境の改善充実	学習環境のユニバーサルデザイン化	<ul style="list-style-type: none"> ・場や時間の構造化、情報(刺激)の調整等をすべての教室で取り組み、すべての子どもが安心して学べる学習環境を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に、具体的な取組を確認し、全職員で取り組む。(前面掲示:学級目標と生活目標、電子黒板のブラックアウト、棚のカーテン化) ・給食当番表様式の統一化を行う。 ・スケジュールボード、タイマーを活用し、学習や生活の見通しを持たせる。 	A	(職員)「すべての子どもが安心して学べる学習環境のユニバーサルデザイン化」:合計(92.3%) 【前面掲示物の精選、統一化した給食当番表、活動の見通しを持たせるためのスケジュールボード、タイマーの利用、準備や整理をする場所を示す写真、文字カードを利用した教室の構造化】 ・今年度からの取組で、前面掲示物の精選、学習の見通しを持たせるためのスケジュールボード(時間や活動内容の提示)等できるところから取り組んでいる。効果については、短期的又は長期的に表れる部分があるので、今後も継続して実践し、児童の様子や変化を見守っていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> ○スケジュール、タイマー等の活用を徹底するとともに、学習の「めあて」を示し、活動の見通しをしっかりと持たせる。 ○給食当番表以外にも、全校的に統一化できるものを検討する。 ○教材の視覚化、学びのスケジュール提示等、すべての子どもが参加する、できる、わかるための授業改善を実施する。
	○小学校低学年の学習環境の改善充実	学習習慣や生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・話を最後まで静かに聞くことができる児童を90%以上にする。 ・学用品の忘れ物がない児童を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の授業で話を聞く態度について、随時指導をする。 ・自分のことが相手に伝えられるように話し方の指導をする。 ・「べんきょうのやくそく」を配布し、家庭学習の習慣化を図る。 ・「家庭学習チェックシート」を実施し、家庭と連携を図りながら学習習慣や生活習慣を確立させる。 ・学用品の忘れ物については、個別に指導し、家庭との連携を図る。 	B	(児童)「先生の話をよく聞き授業」: 合計(98.5%)「必要な道具を忘れずに」: 合計(92.5%) ・おおむね9割の児童は、授業中、きちんと話を聞くことができている。 ・作文や日記の発表、スピーチ等に取り組んで、自分のことをたくさん話すことができる児童が増えてきた。ただ、人前に出てあらためて話すことへの抵抗感強い。 ・家庭学習については、年に3回家庭学習チェックシートを実施し、家庭や学校との協力を得ることができている。 ・就寝時間が遅い児童、話を最後まで聞けない児童がいて、規則正しい生活ができているとはいえない。	<ul style="list-style-type: none"> ○日々の生活の中で、話し方名人、聞き方名人のモデルになる児童を取り上げ、意欲、態度の向上をめざす。 ○基本的学習習慣については、学級通信で全体に向けて啓発を図り、個別に指導が必要なときには、保護者との連絡を密にする。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・3つのプロジェクト構成で学校経営方針に基づいた評価項目、目標、方策等を検討したことで、全職員の学校運営への参画意識が一層高まっている。また、学期の初めに、各プロジェクトから児童へ目標や方法を具体的に説明する等、学校全体で取り組む体制もできている。中でも、校内研修は、「道徳の時間」の研究2年目を迎え、児童の心を揺さぶり、考えを交流させながら、児童の心に響く授業改善が着実に進んでいる。また、特別支援教育の体制づくりが整い、外部専門機関との接続や定期的な校内研修により、全職員が共通して児童の教育的ニーズに対応した支援ができている。

・学力向上の基本となる家庭学習、生活習慣等、様々な取組の「継続」「徹底」ができているので、その成果が学習状況調査等に表れている。また、運動や食育の大切さを指導しながら、水泳大会、マラソン大会、大縄大会、縦割共遊等の活動を計画的に実践していることで、児童の体づくりに対する意識の高まりが見て取れる。

・3年目を迎えたコミュニティ・スクールは、久間コミュニティとの連携を密にし、事前の打合せでねらいや内容を共有したことで、児童の豊かな学びがさらに深まり、地域連携教育に関する職員の意識も高まっている。

・学習の課題提示、児童の学習成果の提示や説明等、学習への動機づけや思考、理解を深める手立てとして、電子黒板の活用効果が実感できている。そのため、職員の間で利点や実践例の情報交換もできている。

・特色ある学校づくりを進めていくために、学校目標に準じた項目の精選や目標設定を全職員で引き続き行っていきたい。また、よりの確かな評価を行うために、達成基準やアンケート項目の見直しを行うとともに、保護者アンケートをする際に学校のグランドデザインを同封する等、学校運営に関する理解と周知も図ってきたい。

・地域連携による教育活動は充実しているが、「継続」することが大切だと考える。無理のない運用に加え、家庭、保護者を巻き込んだ教育活動を展開し、児童の豊かな学び、安心できる教育環境づくりを進めていきたい。さらに、児童の学びを家庭や地域で生かす教育活動を模索し、学校が拠点となって家庭や地域で育てる環境づくりを進めていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目